西南学院大学　国際文化論集　第30巻　第２号　15－20頁　2016年２月

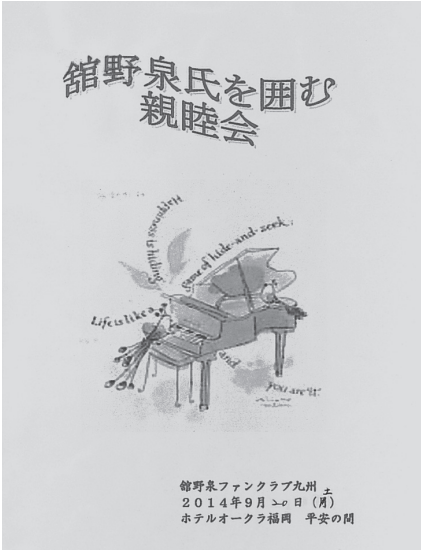
魅力の由来を探る－遊び心の昇華

塩　野　和　夫

はじめに

舘野泉[1]は現在「左手のピアニスト」と呼ばれている。脳溢血（脳出血）のため2002（平成14）年に右半身不随となったが，04年には演奏活動を再開する。09年以降は海外各地でも精力的に活動を続けている。

舘野泉ファンクラブ九州が主催する「舘野泉氏を囲む親睦会」（2014年９月20日，ホテルオークラ福岡）では，午前11時15分より「《演奏曲目》 秘密です」のピアノ演奏を堪能した。会食の後に持たれた懇親会で，各テーブルから舘野泉先生に「フィンランドの空気の色」，「お正月の過ごし方」，「奥様のマリアさんはいつ日本に来られるのか」などと質問が寄せられる。



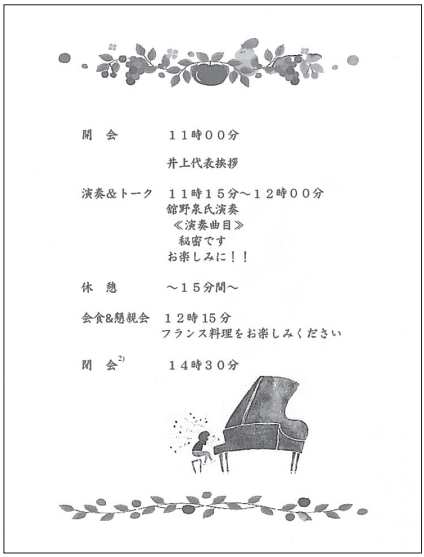
表紙「舘野泉氏を囲む懇親会」

質問内容が多様であっただけに際立ったのは，ほぼ全員が「今日の演

1) 舘野泉は 1936（昭和 11）年に東京都目黒区で生まれ，60 年に東京藝術大学を首席で卒業した。64 年にヘルシンキへ移住し，73 年には「ファンクラブ」が結成された。2006（平成 18）年に「舘野泉左手の文庫（募金）」を設立している。

奏は素晴らしかった」と異口同音にスピーチを始められたことである。しかも，聞いたばかりの演奏に対する感動を込めて「素晴らしかった」と語るスピーカーの顔は，いずれも紅潮しているように見えた。

聴衆の心をとらえてやまなかったピアノ演奏の素晴らしさとは何なのか。いくつかの視点から考えてみたい。



開　会　　１１時００分

井上代表挨拶

演奏&トーク　１１時１５分～１２時００分
舘野泉氏演奏
≪演奏曲目≫
秘密です
お楽しみに！！

休　憩　　～１５分間～

会食&懇親会　１２時１５分
フランス料理をお楽しみください

閉　会[2)]　　１４時３０分

プログラム[2)]

1　チャレンジ精神

舘野泉のコンサートには（私が知る限りにおいて），毎回新たな曲目が加えられている。その意欲的な姿勢には新たな世界（あるいは，現代において見忘れられている精神性）に果敢に挑んでいこうとする力動性が満ちている。

たとえば，「舘野泉ピアノ・リサイタル2010」（2010年10月26日，福岡銀行本店大ホール）における感動を次のように記した[3)]。

> リサイタルは舘野泉さんのピアノソロによる「間宮芳生：風のしるし・オッフェルトリウム」で始まった。「風のしるし」，それは「アメリカ先住民ナヴァホ族の創造神話で語られる風の神」のことだという。合衆国南西部アリゾナ州などに住むナヴァホ族にとって風は命を運ぶ聖なる存在である。い

2) 筆者は司会者に指名され，閉会の挨拶をした。その時の内容を親睦会の翌日 9 月 21 日に文章化した。本稿はそれを元にしている。したがって，懇親会の様子が伝えられている。

3) 参照，塩野和夫「さまざまに聖霊が吹き抜けたあの夜」（『舘野泉ファンクラブ九州会報　LÄHDE』第 24 号，2012 年，4 頁）

や風だけでなく，動物も植物も大地も川も自然現象もそして人間も精霊を宿す。だから，精霊の宿る世界を人間は精霊と共に生かされて生きる。舘野さんは「風のしるし」を精霊の宿る風としてだけでなく，それによって生かされる私たちの命をも力強く表現された。

無垢な精神でチャレンジする舘野の演奏によって呼び起こされた一つの経験がある。1998（平成10）年９月から１年間，家族でアメリカ合衆国のボストンにすごした。99年春になってボストン美術館（Museum of Fine Arts, Boston）の家族会員となり，毎週のように美術館へ出かけた。行くたびに新たな美の世界を開示してくれる作品群の中で，必ず足を運ぶ場所があった。それは印象派の絵画を展示している部屋で，そこに入ると Renoir, Dance at Bougival. の前に立った。すると，「これが人間なのだ！」と作品を通して語りかけるルノアールの声が心に響き続けていた。

それにしてもなぜ，舘野のピアノ演奏とルノアールの絵画作品なのか。両者から直観させられた共通性は何なのか。それがチャレンジ精神であり，どこまでも生きた人間にこだわり，人間の内面に挑んでいく姿勢である。「舘野泉氏を囲む親睦会」（2015年４月29日，ホテルオークラ福岡）の休憩時間に，ばったりと舘野泉氏と出会った。聞いたばかりの演奏を思い出しながら，「今日の演奏はチャレンジ精神に満ちていて，素晴らしかったです」と挨拶する私に，舘野氏はうれしそうにうなずいておられた。新たな世界への挑戦，チャレンジ精神は舘野泉の魅力の一つに違いない。

２　宗教性あるいは霊性（スピリチュアリティー）

舘野泉が最近の親睦会で毎回しかも最初に演奏する曲目「バッハ＝ブラームス　シャコンヌ」は興味深い。何度聴いても魂にまで響く新たな感動がある。毎回心を揺さぶる感動の深さ，新たな新鮮さとは何なのか。舘野が奏でるシャコンヌから受けた感動を次のように表現した[4)]。

バッハ・シャコンヌの演奏に覚えたあの感動は何であったのか。さらに言うと，あの時演奏者と会衆があたかも一つになって体感していた至福の世界とは一体何であったのか。オルガンなどで聞き続けているバッハの作品はいずれも傑出した構造を持っている。だから，演奏者は作品の構造を研究して理解し，構造そのものが奏でる音楽を演じようと試みるのであろう。これまでに何度となく聴かせていただいた舘野泉さんのバッハ・シャコンヌも感動的だった。それは作品を深く理解した上で，魂を込めて弾いて来られた故である。魂を込めることによって舘野さんのバッハは音の深みと鋭さを増した。そこには会衆を感動させる響きがあった。だが，今回のバッハ・シャコンヌの深い感動はそれだけでは説明がつかない。次元が違うのである。聖書に「父（神）は悪人にも善人にも太陽を昇らせ」とある。温かい陽ざしに，すべての人間に注がれている神の良き意思を思うようにとの教えである。日本の宗教家でも法然や親鸞はひたすら念仏する者に向こうから与えられる弥陀の救いを説いた。今回の演奏で与えられた至福の世界はそれらにも似ていると私には思われた。

舘野は宗教者ではなく，宗教的な装いともおよそ関係がない。そうであるのになぜ彼の演奏は宗教的な世界を奏で，聴衆に共感を呼んでいるのか。興味深い事実がある。従来，霊性（スピリチュアリティー）は宗教界に限定して使用されていた。ところが近年，宗教界以外でも幅広く関心を持たれ使われているという指摘である。この事実の背景には現代社会において多くの人々が精神性の根底にあって，精神性を生み出す霊性（スピリチュアリティー）に関心を持たざるを得なくなっている現実がある。

舘野「シャコンヌ」に宿る宗教性は，霊性（スピリチュアリティー）をめぐる現代社会の潮流の中に置くことによって理解できる。初めから宗教性があったわけではなく，舘野がそれを表現しようと努力したわけでもない。彼はあく

---

4) 参照，塩野和夫「共有した至福の時」（『舘野泉ファンクラブ九州会報　LÄHDE』第 26 号，2013 年，14 頁）

までチャレンジ精神をこめて人間の精神性に挑戦し続けてきた。ところが真摯に向かい続けていると，精神性の根底にある霊性（スピリチュアリティー）の世界が開けてきた。これが舘野「シャコンヌ」に宿る宗教性に違いない。

３　「遊び心」の昇華

「左手のピアニスト」舘野泉の魅力は多くあるだろう。その中から２つだけ取りあげて論じた。「チャレンジ精神」と「宗教性あるいは霊性（スピリチュアリティー）」である。ところで，一見無関係に思われるこれら２つは舘野泉のなかで何らかの関わりを持っているに違いない。そうだとしたら両者はどのように関わっているのだろうか。「遊び心」の昇華として考察してみたい[5)]。

舘野泉の演奏を生み出している「チャレンジ精神」は，彼の「遊び心」に関係している。創造性に満ちた幼い日の泉にとって，弾き始めたばかりのピアノは遊び心の対象であっただろう。青年期を過ごした慶応高等部は「出来の悪い学年で，６年生・５年生・４年生がいた」と話しておられた。枠にはまらない高校生活において，遊び心は自由な力動性へと変化していたと推測できる。「先生の演奏スタイルは若い日と変わらない！」という指摘を聞く。若い日の「遊び心」が今日の演奏における「チャレンジ精神」と連続していて，深く精神性を秘めた独自性を生み出しているに違いない。

しかし，遊び心がそのままで今日に連続しているわけでは決してない。およそ芸術は精神性を込めて打ち込んだ先達の営みがあって，彼らによる多くの蓄積と共に現在がある。だから，芸術的蓄積と真向かいになる地道な努力の日々を経て，その結果として個々人の演奏は獲得されていく。音楽家が自らの精神性を表現できるまでに演奏を磨くためには，先達の営みに学びつつ自らを磨かなければならない。

---

5) 精神性の昇華について筆者は次の論考で考察している。塩野和夫「歴史に記憶される人間像－松原武夫・栄の生涯を読み解く」（『キリストにある真実を求めて ― 出会い・教会・人間像 ―』205-331 頁）

舘野の場合，若い日の遊び心がチャレンジ精神となり，精神性を表現する演奏，さらには宗教性を秘めた演奏にまで繋がっている。たとえば，舘野泉ファンクラブ九州の「舘野泉氏を囲む親睦会」（2014年９月20日，ホテルオークラ福岡）の演奏には，霊性（スピリチュアリティー）豊かな曲がいくつもあった。それらを理解し表現するためには，宗教性と結びつく純真な幼い日の心を取り戻すことが不可欠であろう。家族団欒の食卓や楽しくダンスに興じる青年を想像させる曲もあった。舘野はそれらを力強く弾いていた。その演奏は若い日の心を思い起こさせていた。

遊び心が昇華されて，豊かで個性ある演奏を生み出していると実感したわけである。

おわりに

およそ音楽は演奏者と聴衆が一体となって生み出すものである。その意味で舘野泉はよき聴き手にも恵まれた音楽家に違いない。

舘野泉ファンクラブ九州も優れた聴き手であることを，次の文章は端的に記している[6)]。

> 「舘野泉ファンクラブ九州20周年親睦会」（2013年４月29日，ホテルオークラ福岡）の会場に，舘野泉さんの飾り気のないアナウンスが流れる。「初めはバッハのシャコンヌを弾きます」。その瞬間，会衆は息をのんで演奏に備える。ピアノに対して背中向きに座っていた私は，そのままの姿勢で軽く頭を下げ全身を耳にした。

稀有のピアニスト舘野泉とファンクラブ九州という聴き手によって生み出された内容豊かな演奏会に参加させていただいた。このように恵まれた場を与えられて，「魅力の由来を探る ― 遊び心の昇華 ―」はまとめることができた事実を記して結びとする。

---

6) 参照，塩野和夫「共有した至福の時」（『舘野泉ファンクラブ九州会報　LÄHDE』第 26 号，2013 年，14 頁）